

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380978

研究課題名(和文) アルコール関連問題の支援者へのエッセンシャルスキル獲得に関するプログラムの開発

研究課題名(英文) Essential Skills in treatment for Addiction

研究代表者

石井 宏祐 (ISHII, Kosuke)

佐賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：30441950

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)： アルコール関連問題に携わる支援者のためのエッセンシャルスキルに関する研究を行った。重大な健康問題かつ社会問題であるアルコール関連問題については、国内外でいくつかの優れた回復支援プログラムが開発されている。しかしながらこれらのプログラムを、支援者がどのような回復像を目指し、いかなる態度で取り組むべきかについては、ほとんど語られてこなかった。いわゆるエッセンシャルスキルについての整理が大きな課題として残っていた。本研究では、現代社会の特徴といえる嗜癪を再定義し、心理臨床家もまた、自身の嗜癪性に自覚的であることが求められるとの観点から、脱嗜癪的アプローチの必要性を論じた。

研究成果の概要(英文)： This study aimed to redefine addiction, which can be considered a characteristic of modern society, and argue that a de-addictive approach is needed from a viewpoint requiring helping professions to be more subjective of their own addictive nature. First, this study incorporated the idea of attempted solution focusing on family therapy, conceptualized addictive attempted solution, and pointed out the dangers of support specialists' addictive attempted solution. Additionally, this study provided three characteristics of the de-addictive approach: (1) the stance of entrusting control, (2) respect for change that had already taken place, and (3) the paradoxical affirmation of the current condition in not prompting change. Alcoholics Anonymous and Family Therapy helped account for the outcome.

研究分野：臨床心理学

キーワード： アディクション アルコール関連問題 専門家の嗜癪性 脱嗜癪的アプローチ 家族療法 エッセンシャルスキル 臨床心理学 社会福祉学

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) アルコール関連問題に携わる専門家スタッフにとって「回復像の構築」が不可欠

アルコール関連問題は、再発率や死亡率の高い(一般人口の2~5倍)重大な健康問題であり、また社会問題である。飲酒による重大な交通事故や、うつ、暴力行為等の社会的諸問題との深い関わりが指摘されている。我が国のアルコール関連問題に関する経済的損失については、1987年の試算では4兆6千億円にもものぼる。アルコール依存症者は、2005年の調査によると全国に80万人存在し、その予備軍が440万人存在しているといわれている。研究代表者と研究分担者3名は、アルコール臨床を専門とする臨床心理士と精神保健福祉士であり、それぞれが個別の臨床現場をもつ一方、精神科病院で10年続くサポートグループのスタッフとして、共通のフィールドも有している。スタッフには医師や看護師、作業療法士など、幅広い職種が関わっているが、現場の声としては今なお、アルコール関連問題は、「回復が難しい」「できればアルコール依存症には関わりたくない」「自助グループにつなげることが成しうる最良の仕事だ」など、抵抗感や無力感が語られることが多いという。ミラーら( Miller et al., 2003 )は、アルコール治療の結果に強い影響を及ぼす共通因子として、希望、共感、自己肯定感を見出している。スタッフが希望を見出すことに困難を感じることは、患者やその家族にネガティブな影響を与えてしまうだろう。再発率や死亡率の高さから、スタッフは回復に希望が持てぬまま、回復像がイメージできないまま、援助に携わり続けることになる。そのため抵抗感や無力感がつのっていくという悪循環に陥っているのである。専門家スタッフの回復像の構築を援助することが、直接的な専門家スタッフへのエンパワーメントとなり、間接的にアルコール関連問題への有力な対策になるであろう。

### (2) 自殺対策としてアルコール関連問題は喫緊の課題

我が国では1998年に自殺者の急増が起こり、そこから14年連続で3万人を超える自殺者数が続いた。こうした事態に対してこれまで国を挙げて自殺対策に取り組む体制が整備されてきた。うつ病の早期発見・早期治療に力点を置いた対策が続き、平成24年には3万人を15年ぶりに下回った。平成20年からは自殺ハイリスク者対策のひとつとしてアルコール・薬物依存症対策が明記されている。うつ病とともに、アルコール関連問題を対策に加えたことも有効だったと考えられる。アルコール使用障害患者の高い自殺念慮や自殺企図の経験率の高さに関する我が国の報告や、アルコール使用障害のうつ病よりも高い自殺死亡率に関する海外の報告もあり、今後もアルコール関連問題への取り組みは喫緊の課題であるといえよう。

### (3) 優れた回復支援プログラムが国内外で開発されているなかで専門家スタッフに求められること

アルコール臨床において、国内外で優れた回復支援プログラムがすでに開発されている。たとえば、ブリーフインターベンションや動機づけ面接法、CRAFTなどがあり、特に我が国においてはSMARPPなど非常に優れたプログラムが開発されている。

しかしながら、テキストやマニュアル、構造化されたスキルを活用する際に求められる支援者のエッセンシャルスキルについては、知りうる限り触れられていない。田辺(2013)も述べているように、「当事者の体験を真摯な姿勢で傾聴し、嗜癪問題をもって生き続けることの困難さ、当事者ならではの苦悩に理解を深める」ことが肝要であるが、そのためのエッセンシャルスキルがまだ体系化されていないのが現状なのである。優れた回復支援プログラムを活用するための、エッセンシャルスキルに関する整理がなされていないのである。

先に述べたように、回復像が不明瞭で、回復に希望を持てなければ支援は難しい。また、スタッフがアルコール臨床への抵抗感と無力感から、患者やその家族とは自分は違うのだと考え、外側から正そうとするようなスタンスでも支援は困難である。ミラーら( Miller et al., 2003 )は、特に共感を治療上の重要な共通因子と位置づけたが、支援者自身が自らの嗜癪性を自覚し、そこから患者やその家族を理解するような共感性が求められているといえよう。

## 2. 研究の目的

アルコール関連問題に携わる支援者のための、エッセンシャルスキルを明らかにする。重大な健康問題かつ社会問題であるアルコール関連問題については、国内外でいくつかの優れた回復支援プログラムが開発されてきた。しかしながらこれらのプログラムを、支援者がどのような回復像を目指し、いかなる態度で取り組むべきかについては、ほとんど語られてこなかった。いわゆるエッセンシャルスキルについての整理が大きな課題として残ったままといえる。アルコール臨床について専門家スタッフは今なお、回復が難しくあまり関わりたくない、といった抵抗感や無力感を抱くことが多い。本研究では、「回復像の構築」と「自らの嗜癪性への気づきに基づく共感」に着目し、エッセンシャルスキルについて明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1) 量的方法

質問紙法によって得られたデータを統計的手法を用いて分析した。

### (2) 現象学的方法を用いた質的研究

インタビューによって得られた逐語デー

タを、Giorgi, A. (2009 / 2013)と Giorgi, A. の弟子である Wertz, F.J. (1983) の方法を基にした石井 (2016) の方法を用いて分析した。

プロセスは、インタビューの音声データを逐語録に起こす。全体の意味・感覚を得るために読み込む。調査協力者と調査者の対話を、発言者が特定できる形で3列からなる表の左側の欄に記入する。調査協力者の叙述を、句読点にこだわらず、調査者の発言を跨ぐことも気にせず、意味の転換を経験する箇所で行き止まりし、意味単位を明確にする。調査協力者の自然的態度からの表現を、意味単位ごとに現象学的心理学的に感受性のある表現へと変換する。すなわち今研究している現象に関して生きられている経験の心理学的側面を露わにする言葉へ変換する。変換後の叙述は、3列の表の中央に記入し、変換が足りない場合はさらに右側の欄に記入する。この時、研究者が自分自身の経験の分析ではなくて、ある他者の経験の分析を行っているということを明瞭にするため、一人称表現を三人称表現に変える。調査協力者ごとの「個別的心理構造」を、変換された意味単位の最後の欄に基づいて想像自由変容を用いて検討し叙述する。複数の調査協力者の経験を、その個別例あるいは特殊例として包括して理解する「一般的心理構造」を叙述する。以上の7ステップからなる。

#### (3) KJ法を参考にした質的研究

インタビューの逐語録を作成し、内容を質的にグループ化するために KJ法を参考にした分析を行った。プロセスは、カード化、カードの分類、見出しをつける、繰り返す、図解する、以上5つのステップからなる。

#### (4) その他

理論研究、文献研究、事例研究の際には、それぞれの手法を用いた。

### 4. 研究成果

初年次は、看護師を対象にした質問紙調査を行い、アルコール依存症者の回復可能性を見出すことの重要性が明らかになった。また、学会でも嗜癪的でない変化観について発表した。さらに、嗜癪的に嗜癪問題にアプローチしてしまう援助者の危険性をふまえて脱嗜癪的なアプローチについて論文にまとめた。

2年次は、アルコール依存症者へのインタビューデータを分析し論文にまとめた。また、アディクションの重要概念であるコントロール感を測る尺度を作成した。さらに、

精神科領域における ARP の変遷と課題をまとめた。加えて、暴力への嗜癪と考えられる DV に着目し、DV からのサバイバーを対象とした調査を行い、論文を2本にまとめた。

3年次は、嗜癪からの回復が自助グルー

プによって支えられるメカニズムを家族療法の理論的立場から考察し、また嗜癪からの回復に特に必要とされる不確かさへの耐性についてベイトソンの理論的立場から考察し、論文として執筆した。

最終年次である4年次は、アルコール依存症からの回復のためのサポートグループに参加する、当事者へのインタビューを分析した論文と、スタッフへのインタビューを分析した論文をまとめた。また、嗜癪的でない対話を基調としたチームアプローチの事例を考察し論文にまとめた。さらに、教育現場におけるキャリア教育において、嗜癪的でないアプローチを用いた事例を考察し論文にまとめた。

研究全体を通して、現代社会の特徴といえる嗜癪を再定義し、支援者にもまた、自身の嗜癪性に自覚的であることが求められるとの観点から、脱嗜癪的アプローチの必要性を論じた。まず、家族療法が重視する解決努力の考え方を援用し、嗜癪的解決努力を概念化し、援助専門家の嗜癪的解決努力の危険性を指摘した。さらに、アルコール依存症・アノニマスや家族療法が有する脱嗜癪性を整理し、脱嗜癪的アプローチの性質として、コントロールをゆだねる姿勢、すでにある変化の尊重、変化を促さないことによる現状のパラドキシカルな肯定、の3点を挙げた。

重大な健康問題かつ社会問題であるアルコール関連問題については、国内外でいくつかの優れた回復支援プログラムが開発されてきた。しかしながらこれらのプログラムを、支援者がどのような回復像を目指し、いかなる態度で取り組むといいのかについては、ほとんど語られてきてこなかった。いわゆるエッセンシャルスキルに関する議論が不十分な状況であった。本研究では、エッセンシャルスキルを脱嗜癪的アプローチの3つの性質として同定した。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 15 件)

松本宏明・山口恵理子、大丈夫だと無理してしまう男性とチームとの安全な対話、志学館大学心理臨床研究器用、査読無、8、2018、13-27

若本純子・石井宏祐、初等・中等教育におけるキャリア教育と進路指導、佐賀大学教育学部研究論文集、査読無、2(1)、2017、237-246

岡田洋一・石井宏祐・松本宏明・岡田明日香、アルコール臨床のサポートグループに関わるスタッフの経験、鹿児島国際大学福祉社会学部論集、査読無、36(2)、2017、41-51

岡田洋一、アルコール臨床におけるサポートグループについての検討：サポートグループに参加する当事者の語り、鹿児島国際大学福祉社会学部論集、査読無、36(2)、2017、32-39

石井宏祐、自助グループによって促されるアルコール依存症からの回復に関する家族療法的考察 アルコホーリクス・アノニマスと断酒会に着目して、鹿児島純心女子大学国際人間学部紀要、査読無、23、2017、1-18

松本宏明、オープンダイアログが照らし出す臨床心理学の専門性 「不確かさに耐えること」をベイトソンの学習として捉える試み、志学館大学人間関係学部研究紀要、査読無、38、2017、13-30

岡田明日香・岡田洋一・松本宏明・石井宏祐、精神科領域におけるアルコール・リハビリテーション・プログラムに関する文献の外観 ARP の変遷と今後の課題、鹿児島純心女子大学こども発達臨床センター紀要こども学研究、査読無、8、2016、71-83

岡田洋一・松本宏明・石井宏祐・岡田明日香、アルコール依存症の形成と回復 ある男性の対人関係を軸とした語りから、鹿児島純心女子大学こども発達臨床センター紀要こども学研究、査読無、8、2016、63-70

石井佳世・石井宏祐・丸田なつき、DV サバイバーのコントロール感は DV からの回復にいかにかに寄与するか 過去の相補的な DV 関係に着目して、志学館大学心理臨床研究紀要、査読無、5、2016、3-10

石井宏祐・石井佳世、コントロール感尺度の作成、鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要、査読無、11、2016、3-15

石井佳世・石井宏祐・丸田なつき、DV サバイバーにおける過去の DV 関係の認識と現在のコントロール感との関連、志学館大学大学院心理臨床学研究科紀要、査読無、9、2015、9-16

石井宏祐、対人援助における脱嗜癖のアプローチ、鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要、査読無、10、2015、75-90

MATSUMOTO Hiroaki, ISHII Kosuke, NAKAMURA Masafumi, NAGAISHI Hiroki and SATO Kohei、What Gregory Bateson's thought brought about Japanese brief therapy、International Journal of Brief Therapy and Family Science、査読無、4(2)、2014、99-111

〔学会発表〕(計 3 件)

向田亮・石井宏祐、短期療法的な見立ての経験、日本ブリーフセラピー協会第 9 回学術大会、2017

今久留主舞衣・石井宏祐、心理臨床家は面接過程においてクライアントへの気がかりな応答をどのように経験しているのか 問題解決型の臨床心理士を対象に、日本家族心理学会第 31 回大会、2014

〔図書〕(計 2 件)

石井宏祐、なんでも人のせいにする子との対話、金子書房、児童心理、2018、65-69

石井宏祐、アディクション(依存症)と ADHD、文部科学省、発達障害のライフデザイン支援〔事例編〕、2016、83-92

〔その他〕

ホームページ等

石井宏祐・松本宏明、ブリーフセラピー入門～初学者の方が陥りやすい行き詰まりのポイントと対処のコツ、日本ブリーフセラピー協会第 9 回大会ワークショップ、2017.10.22

松本宏明・奥野雅子・石井佳世・石井宏祐、苦手・困難・失敗に心理臨床家はどうか向かうのか？ 社会構成主義の視点から、日本家族心理学会第 32 回大会自主シンポジウム、2015.7.18

松本宏明・石井宏祐・中村誠文・永石尋幹・佐藤宏平、家族療法から離れていったベイトソンに学ぶ 変化を抑えた家族療法入門、日本家族心理学会第 31 回大会自主シンポジウム、2014.7.19

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

石井 宏祐 (ISHII, Kosuke)

佐賀大学・教育学部附属教育実践総合センター・准教授

研究者番号：30441950

### (2) 研究分担者

岡田 洋一 (OKADA, Yoichi)

鹿児島国際大学・福祉社会学部・教授

研究者番号：20369185

松本 宏明 (Matsumoto, Hiroaki)

志学館大学・人間関係学部・准教授

研究者番号：90625518